

健康文化

対馬のナンジャモンジャとの出会い旅

北川 勝弘

1 はじめに

本年(2013年)春のゴールデンウィークに、私は朝鮮海峡に浮かぶ上対馬(長崎県)の鰐浦湾を訪れ、35年前から憧れ続けてきた、広く群生するナンジャモンジャ(学名:ヒトツバタゴ、英名:snow blossom)の木々と対面した。私は、湾岸の樹林中に群生する数多くの「雪の花」を間近に眺めることができ、長年の憧れを実現できた喜びに心満たされ、至福のひとつときを持てた。本稿では、ナンジャモンジャに関して、私が今回の対馬旅行で見聞したことや、旅行中に知った興味深い情報、および私の古い記憶の中から呼び起された事柄などにつき、いくつかのエピソードを書きとめることにしたい。

2 対馬への道

35年前(1978年)の5月中旬、私は偶然、岐阜県瑞浪市半原沢(白狐温泉の近く)で満開のナンジャモンジャの木々と出会い、その「雪の花」に“一目惚れ”してしまった。それ以来、毎年その時期になると、瑞浪市だけでなくその近隣の笠置山(恵那市)や蛭川村なども含めて、妻や友人らと一緒にナンジャモンジャ探訪によく出かけたものだ。その経緯については、本誌30号(2001年6月;p.9-14)「ナンジャモンジャの花咲く頃……」に譲る。

毎年のナンジャモンジャ探訪を繰り返すなかで私は、東濃地方のナンジャモンジャがいずれもおおかたは点在しているのに対して、朝鮮海峡に浮かぶ対馬には、ひとつの湾を取り囲む規模でたくさんのナンジャモンジャが群生している、ということを知った。そして、今に一度はその花どきに現地を訪れて、群生するナンジャモンジャの開花状況をこの目で確かめてみたいと、それ以来、強く憧れるようになったのだ。

対馬への経路は、私がたまたま昨年まで3年間、毎年、屋久島やトカラ列島の諏訪之瀬島、小笠原・父島への船旅を続けてきたので、今回もその延長として、福岡県博多港からのフェリーによる船旅としゃれこんだ。

今回の対馬旅行には、妻と二人で出かけた。東濃地方での長年のナンジャモ

ンジャ探訪の“同志”だった妻も、対馬のナンジャモンジャとの対面には、おおいに心を弾ませていた様子だった。その妻が、あまり長時間の航路は船酔いするので途中の壱岐島（いきじま）で一泊したい、と希望したため、はからずも、作家の司馬遼太郎が「街道を行く」シリーズ中の『壱岐・対馬の道』（朝日文庫）で辿った道をなぞる形になった。インターネットで対馬市の観光案内所のホームページを検索したところ、今年は5月4日（土）に上対馬の鰐浦で「ヒトツバタゴ祭」が行われる、と記されていた。そこで、鰐浦のヒトツバタゴ祭見物を主眼として、4月30日早朝に岡崎の自宅を出発し、その翌日に壱岐島を経て対馬へ到着、5月5日に岡崎へ戻る、という旅行計画を立てた。

4/30（火）岡崎～名古屋～博多（博多港）～壱岐島（郷ノ浦港）（泊）

5/01（水）壱岐島観光～壱岐島（郷ノ浦港）～対馬（厳原港）（泊）

5/02（木）対馬：厳原・対馬観光（泊） <タクシー>

5/03（金）対馬：厳原～比田勝（港）（泊） <バス>

5/04（土）対馬：比田勝～鰐浦・ヒトツバタゴ祭～比田勝港～博多港（泊）

5/05（日）博多～名古屋～岡崎

3 上対馬・鰐浦の「ヒトツバタゴ祭」

対馬は長崎県に属するが、九州で一番近い港は福岡県の博多港で、下対馬の東岸中部に位置する厳原港との直線距離は124 km。それに対して、上対馬の北端に位置する比田勝（ひたかつ）港と韓国の釜山（プサン）との直線距離は約50 km。断然、韓国の方に近い。その地理的な条件も影響してか、今日、対馬を訪れる観光客数は、日本国内よりも韓国からの方が圧倒的に多いそうだ。

私たち夫婦は、5月4日に上対馬町の鰐浦で「ヒトツバタゴ祭」を見物した後、その会場から最も近い比田勝港で博多行きフェリーに乗り込む予定だったので、祭の前日の夕刻に、比田勝港に近いペンションに一泊した。ペンションの若主人は中学生の頃、大勢の同級生たちと冬の季節に岐阜県の旧蛭川村へ出かけ、訪問先の中学生たちとスキーや雪遊びで興じたり、いろいろと交流した経験がある、と話してくれた。

さて、5月4日の早朝、私たちはペンションを出発し、比田勝の町の中心部から路線バスに乗り込み、20分ほどで鰐浦のヒトツバタゴ祭の会場へ到着。祭は10時から始まる予定とされていたので、その前に韓国展望所や3000本を超すというナンジャモンジャの花の群生ぶりを眺めようと、鰐浦湾を広く見下ろせる高台まで足を運んだ。天気は申し分ないほどの快晴で、ナンジャモンジャの花は、文字通り純白の「雪の花」の風情で、実に見事だった。



図1 上対馬町鰐浦湾岸に群生するヒトツバタゴ

ただし、韓国の遠望については、視力の衰えた私の眼では残念ながら果たせなかった。

ヒトツバタゴ祭が始まり、大勢の観客が会場の椅子を埋めた。老人の姿が多いが、祭の行事は幼稚園や保育園の園児たちの太鼓や踊りで始まった。若いお母さん、お父さんたちが、カメラやビデオで子供たちの活躍ぶりを一生懸命撮影している様子は、“全国共通”の姿だった。腰かけている老人たちが、「今年のナンジャモンジャは、ここ十年で一番見事なものだと、顔をほころばせて語り合っていた。私たち夫婦は生まれて初めての上対馬・鰐浦訪問の機会に、快晴の天气に恵まれ、めでたく満開のナンジャモンジャと対面できた幸運に加え、上乗せして、「ここ十年で一番」の花のにぎわいに出会えたわけで、何とハッピーなことかと、妻と喜び合った。

4 対馬と岐阜県（旧）蛭川村のヒトツバタゴを介した交流

ところで、ヒトツバタゴ祭が始まってしばらく経つと、司会者が珍しい来賓を紹介した。岐阜県中津川市の副市長以下5名の人たちで、旧蛭川村時代の二十年近く前から、ヒトツバタゴを介して当時の上対島町との間姉妹町村縁組（現

在は中津川誌一対島市間の姉妹都市縁組)を締結し、両自治体間の交流が続けられているという。副市長による祝賀挨拶の後、蛭川では目出度い行事の時に必ず行われるという餅撒きが、5名の客人の手で賑やかに行われた。わざわざ蛭川から持ち運んできた、ビニール袋に複数個ずつ封入した紅白の餅を、会場の人たちは老いも若きも、皆が楽しそうに拾っていた。私たち夫婦も地元の人々に交じって餅拾いに加わった。

昨晚、ペンションの若主人が話してくれた、中学生時代に参加したことがあるという、岐阜県(旧)蛭川村との交流とは、このことだったのかと、初めて合点がいった。冬の季節には、雪降りなどを体験する機会の少ない対馬の子供たちが蛭川村に出かけ、夏季には、海を身近に体験する機会の少ない蛭川村の子供たちが対馬へ出かけて、遊びを通して交流するのだという。

5月の対馬旅行から2ヶ月ほど経った7月末に、私は中津川市蛭川支所を直接訪れ、約二十年も前から上対馬との交流が行われてきた経緯につき、所長さんから直接インタビューさせてもらった。同支所を訪問した際に、両自治体間の交流事業に関わりを持っている市議会議員の方がたまたま来庁しておられたので、一緒に話を聞かせていただいた。

交流のきっかけは、国が主催する自治体職員研修に参加した一人の岐阜県職員が、「自分たちの岐阜県にも、ヒトツバタゴの咲く場所がある」と、長崎県から来た職員に伝え、お互いの地域での取り扱い方について意見交換したことだったらしい。ほんの偶然の、小さな情報交換だったようだが、研修帰りの職員から、ヒトツバタゴの開花を対馬では「ヒトツバタゴ祭」として大事に扱っている、と知らされた蛭川村の当時の村長は、すぐ自分自身で上対馬町まで足を運び、両自治体間での“ヒトツバタゴを介した交流”を申し入れたという。行政の責任者として、地域興しにつながる題材を見逃すまいとする、その鋭い感性と行動力には頭が下がる。それ以後、二十年近い長期間にわたり、両自治体間の交流事業は地道に続けられてきているようだ。自治体同士が互いに、地域振興に役立つ取り組みを大事に育んできている姿勢に、私は深い感銘を受けた。

5 ナンジャモンジャの普及に半生を捧げた人

対馬旅行から岡崎に戻ってしばらくすると、岡崎や名古屋などの市内では、街路樹のナンジャモンジャがちょうど満開の花を開かせるようになっていたり、その開花模様が、新聞紙面を賑わわせた。そんなある日、ひとりの知人が「わが家に近い小学校の校庭でも、ナンジャモンジャの花が満開だ」と、嬉しそうに教えてくれた。それを聞いて、私は30年ほど前にたまたま新聞で見かけた、ナ

ンジャモンジャの普及に半生を捧げた人のことを、ふと思い出した。

その新聞記事に関する正確な情報は、今では私の記憶からほとんど揮発してしまっているが、確か1980年の晩春頃、『朝日新聞』の人物紹介欄に紙面の2/3ほどを使い、大写しの人物写真入りで掲載された記事だったと思われる。

その新聞記事で紹介された人は、岐阜県羽島町に在住で、自分が長い年月をかけて育てたヒトツバタゴの苗木を、岐阜県・愛知県・三重県の全ての小中学校に、数年がかりで配ったという、奇特定の活動をした方である。新聞には、彼がなぜヒトツバタゴの苗木を育てて配る活動を始めるといったのか、その経緯が、詳しく記されていた。そもそものきっかけは、軍国青年だった彼が、第二次世界大戦の終了後、戦地から復員してきて敗戦日本の現実に馴染めず、まったく生きる気力を失って毎日を悶々として過ごしていたとき、たまたま知人から恵那地方へナンジャモンジャの花を見に行こうと誘われたことだという。

5月中旬、生まれて初めて見た満開のナンジャモンジャの花は、日光を浴びてまるで雪が降り積もっているような白い輝きを放ち、清楚な風情で林間に浮かび上がっていた。長い時間、じっとその花の佇（たたず）まいに見とれ、呆然と心奪われていた彼は、やがて、それまでの鬱々とした自分の思いが、ナンジャモンジャの花を眺めているうちに癒されつつあることを感じた。そしてその日、彼はナンジャモンジャの木を離れる際に、多くの人たちにナンジャモンジャの花を眺めてもらえるようにして、自分が得られたような心の癒しを、自分以外の多くの人たちにも味わってもらおう、そのためにナンジャモンジャの苗木を自分が育てて多くのところに配ろう、それこそが今後の自分の生き甲斐になりうるものだ、と決意した。

取り組みを始めてみると、様々な試行錯誤が必要とされたが、彼はこつこつとそうした困難を克服し、たくさんのナンジャモンジャの苗木を育てあげることになった。最初に、岐阜県下の全小学校・中学校へのナンジャモンジャの苗木配布を、数年がかりで取り組み、完了した。それだけでも偉大な事業だが、彼はその成果に安住せず、引き続き隣接する愛知県下の全小中学校へも、岐阜県でと同様の取り組みを継続し、これまた、数年間をかけて達成した。そして、最後に三重県へも。

この紹介記事が新聞に掲載されてから、すでに30数年が経つ。この間には、平成の大合併など、地方自治体の再編統合が行われており、民間の善意の奉仕事業の多くが、記録や資料の消滅／行方不明などの憂き目にあっているのではないかと危惧される。おそらく、岐阜県・愛知県・三重県の自治体関係者の間でも、なぜ今日、県下の全小中学校の校庭にナンジャモンジャの木が植えら

れているのか、その由来を知る人は少ないだろう。この稀有の偉大な事業を一人で半生をかけて実行し続けた彼は、まさに「究極のボランティア」だと考えられるが、その名前だけでなく存在すらも忘れ去られてしまうのではないかと思うととても痛ましく残念な気がする。

6 対馬の歴史に触れる

話は戻るが、旅行初日の夕刻、フェリーが壱岐島の郷ノ浦港へ到着した直後に、観光案内所の売店コーナーで、無料の島内観光パンフレットと並んで司馬遼太郎の文庫本、『壱岐・対馬の道』を見かけたので、早速、購入した。

司馬は同書の中で、対馬は壱岐と並んで、歴史的には、古代に鉄を中だちにして朝鮮と往来していた存在だった、と指摘している。日本は弥生式農耕が開けたことで、倭国が成立したが、さらに朝鮮半島から鉄器が到来して農耕地が飛躍的に拡大し、「国土」ができあがった。6世紀以後の鉄生産の飛躍で耕地が広がり、人口が増えたことを背景として、大和政権が成立する。その後、7世紀に新羅（しらぎ）が朝鮮半島の統一をめざしたとき、百済（くだら）から救援を求められた大和朝廷は、663年に白村江（はくすきのえ）へ400余艘の船団を出撃させたが、唐・新羅連合軍により完膚無きまでに撃滅された。大和朝廷は統一新羅軍がその勝利の勢いに乗って日本に攻めてくるのではないかと恐れ、敗戦の翌年に、対馬や壱岐、筑紫などに防人（さきもり）を置いた。

こうした古代における日本－朝鮮間の関係の歴史について、私は中学・高校時代に断片的に学んだことを思い出す。古希を過ぎた身で生まれて初めて、日本の古い時代の国際関係の現地を訪れ、各地に残されている歴史遺跡のいくつかを訪ね歩いてみると、若き日に自分が学んだ歴史の受け止め方が、如何に皮相なものにすぎなかったか、と痛感された。

日朝関係史については、その後、16世紀末に豊臣秀吉が朝鮮に出兵した文禄・慶長の役、20世紀初頭の日韓併合、第二次世界大戦時における朝鮮人の強制徴用など、日本側からの朝鮮に対する侵略行為が目につく。また、今日の時点では、日本海に浮かぶ竹島（韓国側の呼称：独島）の領有権をめぐる、日本と朝鮮の両国間には大きな政治的蹉跎が表面化し、その平和的な解決が望まれるところだ。

そうした今日の状況を鑑みると、私は対馬の巖原で知った、江戸時代中期（17世紀末～18世紀中頃）に対馬藩の藩儒（対朝鮮外交の事務官）を務めた朱子学者、雨森芳洲（あめのもり ほうしゅう）が日朝間の“善隣外交”維持に果たした役割の偉大さに、改めて畏敬の念を払わずにはいられなかった。

7 対馬で知る江戸時代の“善隣外交”の精髓

鎖国政策がとられた江戸時代に、長崎・平戸を通じての中国・オランダとの交易と並んで、対馬を中継点とする李朝朝鮮との交易も、徳川幕府から認められていた。徳川家康が在世中の慶長12(1607)年に始まり、鎖国政策下の1811年までの前後12回にわたり、徳川将軍の交代ごとに来聘(らいへい)された、総勢400~500名ほどの朝鮮通信使(李王朝の国使)の一行が、釜山から対馬を経て江戸へ至り将軍と対面した。彼らを対馬から江戸まで案内したのは、対馬藩主の宗(そう)対馬守であるが、こまごまとした接待は藩儒が対応した。雨森芳洲は朝鮮語、中国語に精通し、22歳だった17世紀末から60余年の長きにわたり、対馬藩の藩儒として朝鮮外交の衝に当り、活躍した人物である。司馬の上記書物には、芳洲の活躍ぶりが詳しく触れられている。厳原港から比較的近い場所にある長崎県立対馬歴史民俗資料館の脇に、真新しい雨森芳洲の顕彰碑が建てられていて、簡潔な文章で芳洲の人となりが紹介されていた。

「江戸幕藩鎖国時代に、稀有の国際人であった芳洲の名著『交隣提醒』には、『たがいに欺かず、争わず、誠実と信頼が肝要』と説き、対等の交隣思想と人道主義的信念が貫かれている。」

わが国には、今から300年も前の封建時代に、このように卓越した識見を持った先覚者が存在したのだ。芳洲が身をもって示してくれた“誠信の交隣”こそ、まさに現代にも通じる理念であるといえよう。竹島(独島)の領有権問題などでも、私たちは芳洲の教えによく学び、是非とも平和裏に、外交交渉の努力を積み重ねることによって、解決の道を探るべきではなかろうか。

8 おわりに

今回の旅行では、歴史の重みというものを肌で感じさせられた。古代日本の成立に関して、重要な位置を占めている対馬・壱岐については、今後、考古学的な研究も含めて、さまざまな分野からの検討が深められて欲しいものだと、門外漢ながらも念願している。

「ナンジャモンジャはなぜ、対馬と東濃地方に隔離分布していると思いますか？」と、現地の人に質問してみたら、即座に「朝鮮通信使が何らかの役割を果たしたのではないか」との回答が返されてきたのでビックリした。これまで自分が全く発想したこともない新しい視点であり、大変印象深かった。

(元・名古屋大学農学国際教育協力研究センター教授)